

<b>〔科目名〕</b> 哲学Ⅰ	<b>〔単位数〕</b> 2単位	<b>〔科目区分〕</b> 教養科目																					
<b>〔担当者〕</b> 大森 史博 Ohmori Fumihiro	<b>〔オフィス・アワー〕</b> <b>時間:</b> 授業の初回に提示する <b>場所:</b> 613 研究室	<b>〔授業の方法〕</b> 講義																					
<b>〔科目の概要〕</b> 西洋哲学の歴史に登場する著名な哲学者、および主要な概念を厳選してとりあげ、解説し、考察をおこなう。哲学の学説や概念は一見ただけでは難解にも思われるが、その根本にある思考、核心にある問いに目を向けることにより、この学に端的に接近したい。西洋哲学の歴史にあらわれる人物、思想、概念に触れ、自覚的に考えることをとおして、われわれ一人一人が世界を生きることを学びなおすための思考の鍛錬をおこなう。 授業においては、自分の思考を可視化するための手段としてワーキングシートを作成し、提出してもらう。ワーキングシートによる思考の可視化と振り返りが、考察を深めてゆく助けになるはずである。この方法については授業のなかで詳しく説明する。 基本的には、毎回一つのトピックを読み切りにして、①前回の反復とあらたな問いの提起、②配布資料をふまえた解説、③レスポンスカードの作成、という組み立てをユニットにして授業をする。限られた時間では完結できない場合も多くあるため、くり返し立ち戻りながら考察を深めたい。																							
<b>〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつか〕</b> 哲学は「知を愛する」ということ、つまり、あらゆる事象についてのおくなき探求を意味する。いかにも素朴な知の探求であると思われるとしても、みずからの「問い」をもつことが学問の根本にある。この授業の目的は、具体的な経験と眼前の事象に即しつつ、既存の知識や学問の深層にある「思考」を捉えなおすことである。したがって、自明とも思われる知を再考し、探究を深めていく、学問的な営為の端緒となりうる。																							
<b>〔科目の到達目標〕</b> 西洋の著名な哲学者の思想、主要な概念、核心にある問いを知る。哲学者の問いかけ、思想や概念をふまえ、考えるべき問いを吟味し、仕上げ、提起することができる。																							
<b>〔ディプロマ・ポリシー (DP) との関係〕</b>																							
<table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <thead> <tr> <th colspan="4">学部</th> <th colspan="3">学科</th> </tr> <tr> <th>DP1</th> <th>DP2</th> <th>DP3</th> <th>DP4</th> <th>DP1</th> <th>DP2</th> <th>DP3</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>			学部				学科			DP1	DP2	DP3	DP4	DP1	DP2	DP3				○			
学部				学科																			
DP1	DP2	DP3	DP4	DP1	DP2	DP3																	
			○																				
<b>〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕</b> わかりやすい説明、振り返りができる、西洋の哲学者について深く学べる、といった点をよしとする声が寄せられた。その一方で、ワーキングシートを書く時間が少ない、出席管理が厳しすぎる、内容がわかりにくい、内容が難しすぎてついていけなかった、課題の負担が多い、という指摘があった。この学問に触れ、楽しみながら学んでいくためには、問いそのものをよく吟味し、明確に理解していくことが大切であるが、それが最初はなかなか容易ではない。できるかぎり解きほぐして説明し、十分な理解を促すことができるよう工夫していきたい。気になることや分かりにくい点があれば、その都度対応するので、疑問や不明な点はそのままにせず、遠慮なく質問して欲しい。難しいと感じても、質問すること、対話することができれば、理解も深まり、考えるための手がかりも得られるはずである。丁寧に説明する工夫をかさね、授業の組み立てについても改善していく。																							
<b>〔教科書〕</b> 使用しない。適宜プリントを配布する。																							
<b>〔指定図書〕</b> なし																							
<b>〔参考書〕</b> 『よくわかる哲学・思想』 納富信留 ほか編著、ミネルヴァ書房、2019年 『図鑑 世界の哲学者』 サイモン・ブラックバーン 監修、熊野純彦 日本語版監修、東京書籍、2020年 その他、授業のなかで紹介する。																							

<p><b>〔前提科目〕</b> なし。春学期に開講の「哲学Ⅰ」と秋学期に開講の「哲学Ⅱ」は、各々が独立に完結する授業である。</p>	
<p><b>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</b> 全体の五分の四以上の出席を評価および単位取得の前提とする。 ワーキングシートの論述内容、授業内の活動や発言(50%)、期末の筆記試験(記述式、持込不可)(50%) 期末試験やワーキングシートの内容の評価に関しては、とりあげる思想や概念の正確な理解、問題設定の受けとめ、考察の掘り下げ、という三つの観点を基本として測る。</p>	
<p><b>〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕</b> 哲学には独特の難しさがあると思われるかもしれない。しかし、言葉や事柄そのものの難しさを、ひとつひとつ解きほぐしながら考える作業こそが哲学の営みであり、この考える作業を味わうことこそが、哲学への最良のアプローチの仕方だろう。自ら考え、自ら問いをもつことを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。 授業各回のスケジュールや扱う内容は、参加者の関心や進行状況に応じて変更することがある。</p>	
<p><b>〔実務経歴〕</b> 該当なし</p>	
<p>授業スケジュール</p>	
第1回	<p>テーマ(何を学ぶか): イントロダクション、「哲学とは何か」という問い 内 容: この授業の趣旨と進め方、評価の方法、哲学とはどのような学問なのか  教科書・指定図書</p>
第2回	<p>テーマ(何を学ぶか): 「哲学の始まり」についての問い 内 容: ソクラテス以前の哲学者たち、アルケーの探究  教科書・指定図書</p>
第3回	<p>テーマ(何を学ぶか): 「知」と「不知」についての問い 内 容: ソフィストとフィロソフォス、ソクラテス、プロタゴラス、相対主義  教科書・指定図書</p>
第4回	<p>テーマ(何を学ぶか): 「存在」についての問い 内 容: パルメニデス、存在と時間  教科書・指定図書</p>
第5回	<p>テーマ(何を学ぶか): 「本質」についての問い 内 容: プラトンの哲学、探究のパラドクス、イデア論  教科書・指定図書</p>
第6回	<p>テーマ(何を学ぶか): 「自然」についての問い 内 容: アリストテレスの哲学、理論知と実践知、四原因説、幸福論  教科書・指定図書</p>

第7回	<p>テーマ(何を学ぶか):「確実さ」についての問い          内 容:デカルトの哲学、知と信、懐疑、考える私</p> <p>教科書・指定図書</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか):「自由」と「必然」についての問い          内 容:スピノザの哲学、神即自然、汎神論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか):「なぜ」という問い          内 容:ライプニッツの哲学、予定調和、多元論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか):「知の源泉」についての問い          内 容:ヒュームの懐疑論、連合説</p> <p>教科書・指定図書</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか):「認識の基礎づけ」についての問い          内 容:カントの哲学、コペルニクスの転回</p> <p>教科書・指定図書</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか):「価値」についての問い          内 容:ニーチェの哲学、ニヒリズム、力への意志、永遠回帰</p> <p>教科書・指定図書</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか):「生成」についての問い          内 容:ベルクソンの哲学、生の哲学、純粹持続</p> <p>教科書・指定図書</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか):総括と補足①          内 容:主知主義と経験論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか):総括と補足②          内 容:存在と生成</p> <p>教科書・指定図書</p>
試験	